

徳川時代刊行節用集の展觀に就て

龜田次郎

本篇は昨秋本學圖書館に於ける展觀徳川時代刊行節用集について當時開催の全國高等諸學校圖書館協議會にての龜田教授の講演筆記である。夫を同會誌第十二號より抄出し、今茲に同教授の御諒承を得、轉載して本誌第十六卷第四號所載の展觀書目録と相互對照參看の便に供す(編輯者記)

私は今回本學に於て秋季展覽會を開催するに付て、私の持つて居ります節用集を差出せと云ふことで、私は差出しましたらそれで事が済むだのかと思つて居つたが、數日前の新聞に只今お話になりました新村博士と私とが講演することになつて居た。私は書籍だけ差出したらそれで役目が済むだのかと思つて居ると、講演までやれ、而かも其講演も學校の方に對しては、ではなく、皆さんのお寄りになつて居る會議でやれと云ふことで、甚だ意外千萬であつたが、併し辭退する譯にもいかぬから、二十分位で御免を蒙むることに致します。甚だ詰らぬ話でございますけれども、暫くの間お聞きを願ひます。

節用集は足利の末頃に初めて世に現はれて、明治維新後西洋の字引が入つて來ますまで、通俗辭書として一般に用ひられたやうであります。此名前に付ては、或は支那かぶれをして、論語の學而篇に「道三千乘之國敬事而信。節用而

愛人使民以時」とある文句から出たと云ふ説がありますが、これは同じ通俗辭書で而も同時代に出來た下學集の書名が論語の憲問篇の文句から採つたと其序文に見えてゐるのでそれに眞似た説である、節用集を拵へた人は、節用集と云ふのは必要な季節に使ふ書籍と云ふ意味で名付けたのである。これが穩當なやうに思はれます。是は今申した通りに足利時代に出來たものでありますが、最初誰が作つたか分らんが、只今お話になつた新村博士のお話なり、他の人々のお書きになつてゐる所に依りますと、五山遊りの僧侶が拵へたものと云ふお話であります。誰が拵へたと云ふ證據がないのです。

所が現今、遺つて居ります古い節用集を調べて見ますと、大略三つの系統があるやうに思はれます。第一が普通には伊勢本と申しまして、節用集の一番最初のイの部に天地門或は乾坤門と本に依つては書いてありますが、其最初の語彙が伊勢に始まつて居るのを申します。其次ぎには此最初の語彙が、印度に始まつて居るのを印度本と云つて居ります。第三には此最初の語彙が、乾に始まつて居るのを乾本と云つて居ります。詰り節用集の種類系統には伊勢本と印度本と乾本と三種類あるのです。其の中でどれが一番古いかと申しますと、先づ時代から云つても伊勢本らしい。次ぎが印度本らしい。其次ぎが乾本らしい。それはどうして出來たかと云ふと先づ日本は御承如の通り神國であります。神國だからして、伊勢の大廟があるので、伊勢を一番初めに持つて來た。其次ぎに伊賀を持つて來た。當り前ならば伊賀、伊勢といかんければならないのですが、大廟があるから伊勢、伊賀、と云ふ具合に持つて來た。是が一番最初に出來た。それから其次ぎに出來た印度本はどうして出來たかと云ふと、日本の國々六十六ヶ國を節用集の尻に持つて行つたから、日本の國々の名をすつかり取除けたからして其次ぎにある語彙の印度が最初に出て來たので

ある。今日世に遺つてゐる一番古い伊勢本は、明應五年五月三日の奥付のあるものです。これは皆さんも圖書館で始終お使ひになつてゐる群書一覽の第二巻目の節用集の所に書いてあります。それから日本の國名を節用集の尻の方に廻はして初めて出來た印度本は、どれが一番古いかと云ふと、今日残つて居るのでは、原本かどうか分らぬが、殆ど原本に近いもので弘治二年の寫本があるのです。只今申した通り伊勢本が最初に出來て、次に印度本が出來た。所がどうも日本國の字引として印度を一番初めに持つて來るのは、神國として不似合である。日本國一般にやるには、印度を初めに持つて來ては日本國の字引として體裁が悪いやうな氣がしたか知らんが、今度は印度と云ふ所に關係ある佛の出生したととか、或は鎌倉の五山とか、京都の五山とか云ふやうな佛事に關係したことを書物の最後の所へ持つて來た。さうした所が印度は取れたが、然らば何を持つて來たらよいかと、云ふと節用集の初めは、いろは部門別になつてゐて、而も部分けの最初が乾坤門、天地門であるから最初の語彙に乾を持つて來た。それで乾本が出來たのです。つまり三種の系統は最初日本は神國であるから伊勢を持つて來た。次ぎには印度を持つて來たが體裁悪いからと云ふので、乾坤門だから乾を持つて來たので出來た譯であります。

最初に出來ました所の伊勢本には、天正十八年に、泉州環で刊行されてあります。是は私の知つて居る範圍では、元東京の帝大にあつたのと、今東洋文庫にあるのと、二つ残つて居つたが不幸にも東京大學のものは大正の震災の時に焼けて了つた。今日では東洋文庫だけしかありません。次ぎには美濃紙型半切の横綴の饅頭屋本といふ刊行本があります。この二種が伊勢本での刊行であります。所が印度本の方はどうかと云ふと、どう云ふ譯か知らんが、寫本ではありませんが板本ではありません。刊行されなかつた様であります。所が三番目の乾本は、慶長二年に易林本と云ふ

のが初めて楷書に書いたものが出来た。それが後に或は行書本或は眞草二行本或は楷書本の改刻など種々の本が刊行されてありますが、徳川時代になつてから慶長二年に初めて出版された乾本の系統のものがずつと續いて居ります。徳川時代の節用集は殆んど其全部が此乾本の系統であります。又此時代になつてから段々本屋が、書籍を賣り廣めると云ふやうな商略的關係上、或は其書籍に頭書きを附加へたり、或は増補したりして居ります。又繪入本もあります。所が頭書増補本や繪本は何時頃から出来たかと云ふと、頭書増補は大體寛文年間から出来た。繪入本は元祿四五年からのものは皆それです、それから後になると大きな三世相のやうな本が今日でいふ通俗百科辭典とでもいふ様なものが出来て居ります。又段々後になりますと、新奇を衒ふやうになりまして、節用集はいろは字引、漢字は玉篇が流行つてゐるから、此二つを合併して、上欄は玉篇、下欄は節用集と云ふやうなことになつて本を開けて見れば上が玉篇、下の方が節用集になつて居るやうな、今日で云ふと和漢合併の字引も拵へて居る。之れの出来たのは先づ目録に載せてありまする四十四の元祿六年頃に出来たものが最初で後になつて百十四、百二十二の寛政八年や文化三年にも出来てゐます。此等が玉篇と節用集と合併したものです。所がそれだけでなしに、今度は丁半の偶數、奇數即ち、言葉の數で、例へば稻ならいの偶數の所で引くとか、又禱と云へば、三字の奇數のいの所を見ると云ふやうなことになつて居る。是はずつと後の文化元年刊行の偶奇假名引節用集一名長半引節用集で目録の百二十のものです。尙後になると分類體ではいかぬ、即ちいろは字引で天地門とか、人倫門だけでは便利が悪いと云ふので、今度は假名の數でわけた、いの時なら以、亥と云ふ字をいの一の所で集録し又命、禱と云ふのはいの三の所で引くと云ふやうに假名の數で引く所の字引が出来たのであります。是は後世よく流行つたもので、目録で云ふと八十七です。早引節用集と云

ふ寶曆七年正月再板のものが最初ですから少し之以前に出來た様であります。大變流行つて來て、是が一番勢力を得るのです。所が此節用集も後年種々新奇を銜ふやうになつて、分類體と假名數とを併用したのも出來たが、それは本屋が全く世間の需用に依つたのであります。今日吾々が何の爲めに此等の節用集を使ふかと云ふと、吾々専門から申しますと、日本語の種々の材料として即ち國語史の研究資料として之を引くのです。現に先刻お話になりました新村博士の如きは、節用集をよく御利用になつて、種々新説を出されてゐます。博士は此節用集から南蠻のお話に關係ある言葉を抜かれたり、國語史上の材料をよく抜かれて居ります。今日一般に使はれてゐる南蠻語の日本語化したもので一例を申しますと、シャボン、今の石鹼のシャボンと云ふ言葉は、字引で何が一番古いかと思ふと私が調べた所では、林羅山の拵へた慶長年間の多識篇の中には、シャボン、と云ふ言葉が石鹼と書いてあつて、是は南蠻から來たものだと云ふことを書いてある。それからガラスのことを、私の幼少の時分には能くビイドロと聞きましたが此ビイドロと云ふ語は何時頃から節用集に載つて居るかと思ふと、延寶八年頃に出來た節用集、此目錄で申しますと三十一、三十三の字引には硝子と書いてビイドロと傍訓がつけてあります。是が南蠻語のビイドロの入つた節用集の一番古いものだと思います。それから後の節用集には硝子と書いてビイドロと入つて居ります上に又フラスコなど、書いてあります。此日本の節用集と云ふものは、西洋迄行つて翻譯出版もされて居るのです。それは日本の文化史の上に於て大貢獻大功績のあつたシーボルトの翻譯して出版したものに此節用集があります。それは四十八の元祿十一年に出來て享保以後屢々重板致しました増補和漢合類大節用集一名和漢音釋書言字考といふのであります。何故シーボルトが之を翻譯して出版したかと云ふと、節用集として學術的に申しますと、イロ／＼引用文を記るして居つ

たり或は和漢の書籍から注釋して居り、一番完備した學術的のものでありますから、シーボルトは之を日本の字引の代表として翻譯して居るのです。もう一つは百十の大全早引節用集、天明八年初刻で、近く明治初年迄に十三刻されてゐて是は字引としては言葉の数は、之れ迄出た字引の中で一番多いのです。之をシーボルトが翻譯して、勿論通俗字引として翻譯して居りまして、原稿も出來て居るが、是は出版にならずに残つて居る。現に其原稿が東大の市河博士や大英博物館や日本學會などに所藏されてゐます。又この他舊幕時代に海外に漂流した人が安南まで流されて行つて、彼土の大官に節用集を一冊やつた所が大官連は大に驚嘆したとか、又歸りには支那に行つて、支那の大官に他の一冊をやつたと云ふことが、寛政九年に出來た枝芳軒著南甌記といふ本の第四卷目に載つて居ります。此の贈與したと云ふ節用集は、どれかと云ふと、目錄八十二の寶曆二年刊行の和漢節用無雙囊と八十八の同じ寶曆七年出版の大大節用集萬字海とであります。又節用集は舊幕時代に和蘭との交通の爲めに、此和蘭の影響もあります。現に文化十二年に出來た蘭例節用集と云ふものがあります。これは語彙の第二字迄いろは順にして集め本文に迄挿圖が這入つて居る。本文に挿圖の這入つたのは之が最初のもので頗る珍異なものであります。尙殊に甚しいのは目錄の最後の百六十五の魁本大字類苑と云ふもので、是は慶應二年に出來て明治二十二年四月刊行して居る。是は洋綴です。之を見ますと越前武生の漢學者で谷口松軒と云ふ人が、節用集を和蘭語のハルマ和解といふ名高い辭書に依つて作つたと云ふことがあります。斯う云ふやうにして節用集と云ふ通俗字引も、海外の影響に依つて編纂される様になつて明治御一新まで及んだ。明治維新後になつてからも、私共の幼少な時代に、私共の祖父や祖母が節用集を机の上や硯箱の側に置いて日常使つて居りました。所が是も明治二十年頃までは澤山有つて、さうして随分新版も出來て居る。併し二十年

代になつて山田美妙齋さんの日本大辭典や大槻博士の言海や高橋五郎さんのいろは辭典などの立派な辭典が出来て、西洋流の字引に依つた便利なものが出来た爲めに、段々其影を潜めて今日では殆どないのです。併し大正年間迄はいろは字引があつて現に坊間に青い表紙、赤い表紙で時々出て居る。それは大正時代までどうして残つたかと云ふと、維新頃、寺小屋へ通つて居つた人達は、字引として幼少の時に節用集を引いて居つたから、其使つて居つた習慣や情性が抜けないので、其等の人達が六十、七十になつても元の節用集が便利だからと云ふので、矢張り明治時代には影を潜めたやうだけれども、矢張り引續いて大正七八年頃までいろは字引は出版になつて居ります。

それから斯の如く節用集は、今日では全然影を潜めて居るけれども、字引としては今日では最近大言海を初め種々の完備した澤山の字引が出来て居りますけれども、吾々の如き日本文學なり、日本の語學なりを研究する者には此節用集と云ふものは國語の材料を拾ふ上には決して見逃がすことの出来ぬもので、或は國語の古い言葉拾ひ、或は國語の發音假名遣、國語の語尾活用の変遷はどうなつて居るかと云ふ所謂國語史の研究資料として必要上使ふのであります。それから此節用集はどこで出版になつたかと云ふと大部分は三都江戸と大阪と京都で刊行されて居ります。稀には京都附近の伏見や名古屋や其他の地方で出版になつて居るのがありますけれども、徳川時代に於ける節用集と云ふものは大體出版は三都に限つて居ります。併しタツタ一つ懐ろに入れるやうなもので、早引節用集だけはどうしたものか明和七年に信州の松本で出来て居るのがあります。それだけが除外例であつて、大概三都で出版されて居ります。其の外節用集の中に初版と書いてあるのと初刻と書いてあるのと、再版、再刻と書いてあるのとありますし、又出版所の上に江戸と大阪と京都と並立してあることに付て、イロ／＼面白い事柄や材料があるのです。又節用集の部

分けを十門、十二門、十三門。果ては二十門以上になつてゐるのがあります。が大體からいふと十三門が普通の例であります。以上申上りました事については種々の事項がありますけれども餘り長くなりますしもう時間もありませんから凡て略します。丁度二十分経ちましたから之で話を措きます。甚だ取り止めのない杜撰なお話をしました。